

**[D年] 聖霊降臨節第20主日(2024年9月29日)****【旧約聖書日課】ダニエル書 12章1~4節**

- 1 その時、大天使長ミカエルが立つ。  
彼はお前の民の子らを守護する。  
その時まで、苦難が続く。  
国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。
- しかし、その時には救われるであろう  
お前の民、あの書に記された人々は。
- 2 多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。  
ある者は永遠の生命に入り  
ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。
- 3 目覚めた人々は天空の光のように輝き  
多くの者の救いとなった人々は  
とこしえに星と輝く。
- 4ダニエルよ、終わりの時が来るまで、お前はこれらのことを秘め、この書を封じておきなさい。多くの者が動揺するであろう。そして、知識は増す。

**【使徒書日課】****コリントの信徒への手紙二 5章1~10節**

1わたしたちの地上の住みかである幕屋が減びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。2わたしたちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に願って、この地上の幕屋にあって苦しみもだえています。3それを脱いでも、わたしたちは裸のままではおりません。4この幕屋に住むわたしたちは重荷を負ってうめいておりますが、それは、地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではありません。死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまうために、天から与えられる住みかを上に着たいからです。5わたしたちを、このようになるのにふさわしい者としてくださったのは、神です。神は、その保証として“霊”を与えてくださったのです。6それで、わたしたちはいつも心強いのですが、体を住みかとしているかぎり、主から離れていることも知っています。7目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです。8わたしたちは、心強い。そして、体を離れて、主のもとに住むことをむし

る望んでいます。9だから、体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。10なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。

**【福音書日課】ヨハネによる福音書 11章1~16節**

1ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。2このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。3姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。4イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」5イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。6ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。7それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」8弟子たちは言った。「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」9イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまずくことはない。この世の光を見ているからだ。10しかし、夜歩けば、つまずく。その人の内に光がないからである。」11こうお話しになり、また、その後で言われた。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」12弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と言った。13イエスはラザロの死について話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りについて話されたものと思ったのである。14そこでイエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。15わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。」16すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言った。

## 「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

## ダニエル書 12章1～4節

- 1 その時、大天使長ミカエルが立つ。  
 あなたの民の子らの傍らに立つ者として。  
 国が始まって以来、その時までなかった  
 苦難の時が来る。  
 しかし、その時にはあなたの民  
 かの書物に記録が見いだされたすべての者は  
 救われる。
- 2 地の塵となって眠る人々の中から  
 多くの者が目覚める。  
 ある者は永遠の命へと  
 またある者はそしりと永遠のどがめへ。
- 3 悟りある者たちは大空の光のように輝き  
 多くの人々を義に導いた者たちは  
 星のようにとこしえに光り輝く。
- 4 ダニエルよ、あなたは終わりの時までこの言葉  
 を秘密にし、この書物を封印せよ。多くの人々は  
 探求して知識を増やす。」

## コリントの信徒への手紙二 5章1～10節

- 1 私たちの地上の住まいである幕屋は壊れても、  
 神から与えられる建物があることを、私たちは知  
 っています。人の手で造られたものではない天に  
 ある永遠の住まいです。2 私たちは、天から与えら  
 れる住みかを上に着たいと切に願いながら、この  
 地上の幕屋にあって呻いています。3 それを着たなら  
 〔異本→それを脱いでも〕、裸でないことになり  
 ます。4 この幕屋に住む私たちは重荷を負って呻  
 いています。それは、この幕屋を脱ぎたいからで  
 はなく、死ぬべきものが命に呑み込まれてしまう  
 ために、天からの住みかを上に着たいからです。  
 5 私たちをこのことに適う者としてくださったの  
 は、神です。神は、その保証として霊を与えてく  
 だされたのです。
- 6 それで、私たちはいつも安心しています〔別訳  
 →心強いのです〕。もっとも、この体を住みかとし  
 ている間は、主から離れた身であることも知っ  
 ています。7 というのは、私たちは、直接見える姿  
 によらず、信仰によって歩んでいるからです。8 そ  
 れで、私たちは安心していますが、願わくは、こ  
 の体という住みかから離れて、主のもとに住みた

いと思っています。9 だから、体を住みかとしてい  
 ようと、体を離れていようと、ひたすら主に喜ば  
 れる者でありたい。10 私たちは皆、キリストの裁き  
 の座に出てすべてが明らかにされ、善であれ悪で  
 あれ、めいめい体を住みかとしていたときに行っ  
 た仕業に応じて、報いを受けなければならないか  
 らです。

## ヨハネによる福音書 11章1～16節

- 1 ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、  
 ベタニアの出身で、ラザロといった。2 このマリア  
 は主に香油を塗り、髪の毛で主の足を拭いた女で  
 ある。その兄弟ラザロが病気であった。3 姉妹たち  
 はイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの  
 愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。  
 4 イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は  
 死で終わるものではない。神の栄光のためである。  
 神の子がそれによって栄光を受けるのである。」  
 5 イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛してお  
 られた。6 ラザロが病気だと聞いてから、なお二日  
 間同じ所に滞在された。7 それから、弟子たちに言  
 われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」8 弟子た  
 ちは言った。「先生、ユダヤ人たちがついこの間  
 もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこ  
 へ行かれるのですか。」9 イエスはお答えになった。  
 「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩  
 けば、つまづくことはない。この世の光を見てい  
 るからだ。10 しかし、夜歩けば、つまづく。その人  
 の内に光がないからである。」11 こうお話しになり、  
 また、その後で言われた。「私たちの友ラザロが  
 眠っている。しかし、私は彼を起こしに行く。」  
 12 弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助  
 かるでしょう」と言った。13 イエスはラザロの死に  
 ついて話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りに  
 ついて話されたものと思ったのである。14 そこで  
 イエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死ん  
 だのだ。15 私がその場に居合わせなかったのは、あ  
 なたがたにとってよかった。あなたがたが信じる  
 ようになるためである。さあ、彼のところへ行こ  
 う。」16 すると、ディディモと呼ばれるトマスが、  
 仲間の弟子たちに、「私たちも行って、一緒に死  
 のうではないか」と言った。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・9月29日「聖霊降臨節第20主日」の日課主題は「永遠の住み家」。

・旧約聖書日課は、「ダニエル書」から、本書末尾に置かれた終末黙示の一部。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、「永遠の住みか」に関する勧めの箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「ラザロ復活の逸話物語」の冒頭箇所。

**旧約日課(ダニエル 12章より)**

・「ダニエル書」は、ユダヤ教正典では「諸書」の中に収められた時代物語文書の一つであるが、七十人訳聖書(ギリシア語訳旧約聖書)やキリスト教正典では「預言書」の一つとして扱われてきた。ただし、ユダヤ教正典「後の預言者」所収の預言書とは明らかに性格が異なる文書となっている。前半(1~6章)は「義人ダニエルの物語集」、後半(7~12章)は「ダニエルの見た幻集」として構成されている。前後半を通じて、繰り返し支配者の名を挙げての年代設定が見られるが、全体として年代順に構成されているわけではなく、また、随所に時代錯誤と思われる記述が見られる。通説では、本書は、前2世紀、セレウコス朝シリアの圧迫下でユダ・マカバイらを中心とした抵抗運動からマカベア戦争へと展開していく時代に、400年前の歴史的出来事に託した時代物語形式で、迫害に耐える信仰者を励ます目的で執筆・編纂されたものと考えられており、「エズラ・ネヘミヤ記」同様、必ずしも歴史的事実性を厳密に考えていない。

・本書は「ダニエル」という人物に帰される「義人物語」と「幻」によって構成されているが、これらを帰される歴史上の人物は特定されていないし、おそらく架空の人物である。紀元前2~1世紀ごろのユダヤ教社会では、多くの「義人物語」が好んで語られ、また創作されていたとされる。「義人物語」の伝統は古く、すでに「エゼキエル書」で「かの三人の人物、ノア、ダニエル、ヨブがいたとしても」(エゼ 14:14)という表現で、特定の人物にまつわる「義人物語」が広く流布していたことが確認される。このような「義人物語」は、シュメール神話伝承にも見られ、広く古代オリエント世界で伝承されてきていたもので、「ダニエル」なる人物の義人物語はウガリットから発掘された前14世紀の「アクハトの物語」にも確認されている。

・日課箇所は、本書の最後のまとまりを構成する中に置かれた「幻」の一部。このまとまり部分は、「ペルシアの王キュロスの治世第三年のこと」(10:1)という年代設定がされているが、それによって、ペルシア支配の時代とその後の時代がどのような時代であったかを、事後預言的に告げている。ここで「終わりの時」とされているのは、本書執筆の時代、マカベア戦争(前166~163年)の破滅的状况とその後の回復を指していると考えられている。

・2節「地の塵の中の眠りから目覚める」と言われている事柄は、ユダヤ教における「終末の復活信仰」を指している。それは、続いて記されるように、「最後の審判」と結びついた「復活信仰」であり、信仰に基づいた殉教を称揚することと結びついて、ユダヤ教社会の中で広まったとされる。ただし、紀元前後のユダヤ教で共通の教理であったわけではなく、新約時代のファリサイ派はこれを認めていた一方で、サドカイ派は認めていなかったことが知られる。キリスト者の教会は、この「終末の復活信仰」を主イエスを通じて継承している。

**使徒書日課(IIコリント 5章より)**

・「コリントの信徒への手紙二」は、「パウロ書簡集」の第三に置かれた書簡文書。パウロが独自の宣教団と共にマケドニア伝道に取り組んだ後、行き着いたコリントの地でローマから移住してきていた教会共同体メンバーらと共に立ち上げた教会共同体に宛てて記した一連の書簡の一つ。学者の中には、この「手紙二」の中に複数の書簡が含まれていると見る者もある。

・パウロは、コリントの教会共同体に対して自分が指導者の立場にあると自認していたが、それを認めない者たちもいたために、両者の間で対立が生じることがあった。「手紙二」は、その対立を解消し、和解を図るために執筆されたと推認される。日課箇所は、そのような和解を求めていくに当たって、自分たちが皆、キリストによって救われた者であったとしても、なお地上を生きる者として滅び行く肉体という器の中に留まっている者たちであることを確かめ、「完成」が将来のこととして先送りされている状態にあることを「終末の復活信仰」にも結びつけて確認しようとしている。

・キリスト教会がユダヤ教から受け継いだ「終末の復活信仰」は、初期のキリスト信仰の形成において、大きく二つの役割を果たしていたと考えられる。一つは、本書簡でパウロが示しているような、「すでに救われている」と「いまだ完成していない」との葛藤において、あれかこれかの二者択一に陥らずに、現実の曖昧な状況にある自己を「弱さ」の中にある者として認めつつも、「キリスト」を目標とする将来(終末)の希望に向かっていく態度を喚起する教理として位置づけるものである。もう一つは、「ヨハネの黙示録」に見られるような、「ダニエル書」以来の「信仰による殉教」を積極的に受け入れる無抵抗殉教思想の根拠となる「終末の復活信仰」である。両者は、必ずしも二律背反の思想ではなく、パウロ書簡においても一種の殉教思想的発言は見られる(フィリピ1章など)。

・1節/4節「幕屋」は、ギリシア語「スケーノス」の訳。通常、「幕屋」の意で用いられる「スケーネー」が女性名詞であるのに対して、ここでは中性名詞形が用いられており、例外的な用語法になっている。単なる誤用とも考えられるが、意図的に改変している可能性もある。参考まで、「肉」と訳される「サルクス」は女性名詞、「体」と訳される「ソーマ」は中性名詞である。

**福音書日課(ヨハネ 11 章より)**

・日課箇所は、「ラザロ復活の逸話物語」の冒頭部分。本福音書の構成では、「神殿奉献記念祭」の場面設定の枠(10:22 以下)と「過越祭」の場面設定の枠(11:55 以下)を橋渡しする位置に置かれており、内容的には後続の「過越祭」の枠に進むための導入的な位置づけと解することができる。とは言え、「神殿奉献記念祭」の枠組みに続く位置に置かれていることから、この二つの「祭」の枠組みを接続する意図があったとも考えられる。

・「神殿奉献記念祭」は、前 2 世紀のマカベア戦争の中でセレウコス朝シリアによって蹂躪されたエルサレム神殿を奪還し、再奉献したことを記念する祭りとして、ハスモン王朝・ヘロデ王朝時代に祝われるようになった。その背景には、ハスモン王朝の祖となったユダ・マカバイら一族の殉教を美化する意図があったと考えられる。これを敷衍して、「過越祭」との結びつきで理解されていた主イエスの十字架死と復活伝承を、「神殿奉献記念祭」と結びつけた殉教として理解する者たちがいたのかもしれない。主イエスの十字架死と復活伝承には、確かに殉教思想と親和性の高い言説が含まれるが、「過越祭」との結びつきを強く意識した初期教会では、十字架で死なれた主イエスを「過越の小羊」と位置づけ、「神の一方的な選びによる恵みに基づく救済」の出来事として「十字架死と復活伝承」を理解するようになった。そこでは、「過越の小羊」に何らかの功績があるわけではなく、それも含めて「一方的な選び」として解されるので、主イエスについてさえも「殉教に値する功績」が前提にされているわけではない。「ヨハネ福音書」は、他の「共観福音書」と比較したときに、明らかに「過越の小羊としての主イエス」を明示的に強調している(13:1、19:13~14 など参照)。日課箇所から始まる「ラザロ復活の逸話物語」は、「死と復活」が「殉教に値する功績」を前提としない「一方的な恵みの出来事」であることを明確に示すものとなっている。

**来週の誕生日 (9月29日~10月5日)****主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-6「つくりぬしを賛美します」(= I 79「ほめたたえよ、つくりぬしを」)は、もともと 17 世紀のオランダ独立戦争の最中に愛唱された愛国歌であったものが米国の収穫感謝祭の歌として英訳され(「We gather together」)歌われてきた讃美歌だったが、歌詞が愛国的すぎるとの批判から、長老教会の信徒 J・コリーが新しい歌詞を創作し生まれた。
- ・21-448「お招きに応えました」は、20 世紀米国メソジスト教会牧師で 20 世紀後半の英語讃美歌創作運動(ヒム・エクスプロージョン)の中心的担い手となったグリーンが信仰告白式・堅信式のための讃美歌として作詞。曲は、教会旋法第 6 旋法による交唱聖歌

(アンティフォナ)のための旋律で、17 世紀の歌集から用いられてきたもの。202 番と同曲。

- ・21-516「主の招く声が」は、S.ウェスレーに影響を受けて教会音楽家となった 19 世紀英国人パリーのオラトリオ「ユディト」の中の曲で「讃美歌集」(1924 年版)に採用された旋律に、新しい歌詞を付けて歌うべくグリーンが 1981 年に作詞した。英語原詞は 4 節だが、日本語訳では 5 節に拡大してまとめている。

**21-6「つくりぬしを賛美します」****Wilt heden nu treden voor God den Heere**

1. Wilt heden nu treden voor God, den Heere, / Hem boven al loven van harte zeer, / En maken groot zijns lieven namens eere, / Die daar nu onzen vijand slaat terneer.
2. Ter eeren ons Heeren wilt al uw dagen / Dit wonder bijzonder gedenken toch. / Maakt u, o mensch, voor God steeds wel te dragen, / Doet ieder recht en wacht u voor bedrog!
3. Bidt, wakent en maket, dat g'in bekoring / En 't kwade met schade toch niet en valt. / Uw vroomheid brengt den vijand tot verstering, / Al waar' zijn rijk nog eens zoo sterk bewald!

**English version by J.C.Cory**

1. We praise Thee, O God, our Redeemer, Creator! / In grateful devotion our tribute we bring; / We lay it before Thee, we kneel and adore Thee; / We bless Thy holy name; glad praises we sing.
2. We worship Thee, God of our fathers; we bless Thee; / Through life's storm and tempest our Guide hast Thou been; / When perils o'ertake us, escape Thou wilt make us, / And with Thy help, O Lord, our battles we win.
3. With voices united our praises we offer; / To Thee, great Jehovah, glad anthems we raise. / Thy strong arm will guide us, our God is beside us, / To Thee, our great Redeemer, forever be praise.

**21-448「お招きに応えました」****Lord, We Have Come At Your Own Invitation**

1. Lord, we have come at your own invitation, / Chosen by you, to be counted your friends; / Yours is the strength that sustains dedication, / Ours a commitment we know never ends.
2. Here, at your table, confirm our intention, / Give it your seal of forgiveness and grace; / Teach us to serve, without pride or pretension, / Lord, in your Kingdom, whatever our place.
3. When, at your table, each time of returning, / Vows are renewed and our courage restored: / May we increasingly glory in learning / All that it means to accept you as Lord.
4. So, in the world, were each duty assigned us / Gives us the chance to create or destroy, / Help us to make those decision that bind us, / Lord, to yourself, in obedience and joy.

**21-516「主の招く声が」****How clear is our vocation, Lord**

1. How clear is our vocation, Lord, / when once we heed your call: / to live according to your word, / and daily learn, refreshed, restored, / that you are Lord of all, / and will not let us fall.
2. But if, forgetful, we should find / your yoke is hard to bear; / if worldly pressures fray the mind, / and love itself cannot unwind / its tangled skein of care: / our inward life repair.
3. We marvel how your saints become / in hindrances more sure; / whose joyful virtues put to shame / the casual way we wear your name, / and by our faults obscure / your power to cleanse and cure.
4. In what you give us, Lord, to do, / together or alone, / in old routines and ventures new, / may we not cease to look to you, / the cross you hung upon / all you endeavored done.